

## II. 教育・授業改善、FD

### 1. 全学教育シンポジウム

本シンポジウムは、1996年から年1回開催されており、京都大学の教職員が全学的な教育のあり方や、教育の改善・充実の方向性について議論し、部局の枠を越えて教職員の交流を図る場にもなっています。近年は教育担当理事が主催し、2016年度からFD研究検討委員会(2019年度より教育制度委員会 FD専門委員会に改組)の企画により、本センターが実施・運営を行っています。

昨今、世界や我が国において、高等教育を取り巻く状況や社会が大学に求める役割が大きく変わりつつあり、それらの動きは21世紀に入って、より激しさを増しています。とりわけ、2020年初頭からの新型コロナウィルス感染症の世界的で急速な広がり、社会のあり方や私たちの生活様式を瞬間に激変させました。各国の大学がオンラインによる授業の継続に移行する中、京都大学も含め日本の大学でも全学的にオンライン授業が行われる、という未曾有の状況が生まれました。さらに、キャンパスでの対面活動が制約され、授業内外の様々な教育・学習活動や国内外の学生の移動、留学生の行き来等が大きく停滞するという問題も生じました。

そこで、今年度の本シンポジウムでは、「京都大学の教育におけるニューノーマルを展望する」と題し、今後の京都大学の「より柔軟で強靱」な教育のあり方や、今後京都大学で自主的・自発的に進めるべき教育改革・改善の取り組みの方向性や目的等について、多様な観点から議論することをめざしました。

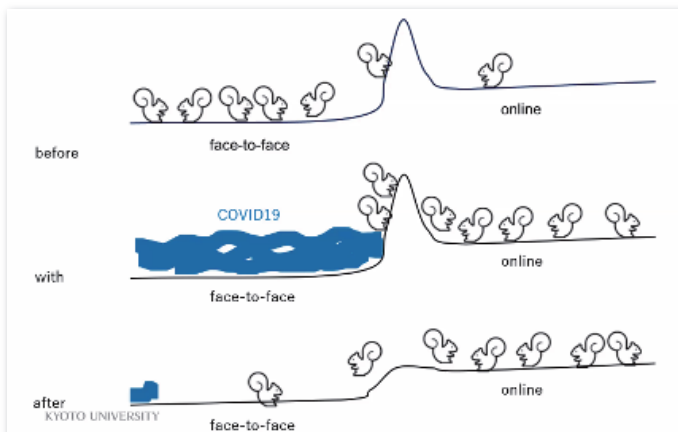
2020年9月11日にオンラインで開催され、参加者は349名でした。例年、本シンポジウムの参加者は240名前後でしたが、今年度はそれを100名近く上回りました。

#### (1) プログラム

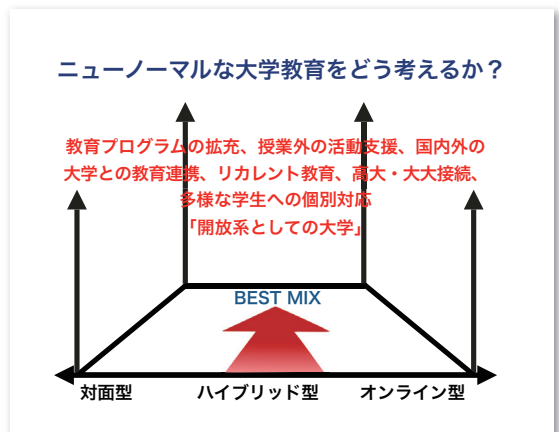
午前の部では、京都大学の教育の現状や方向性をコロナ後も見据えて論じた北野正雄教育担当理事・副学長(当時、以下同)の基調講演「京都大学の教育の課題と可能性：コロナ禍を踏まえて」に続けて、各部局のオンライン教育やオンライン授業支援の取り組み(工学研究科、教育学研究科、国際高等教育院、情報環境機構、高等教育研究開発推進センター)について、それぞれのリーダーにご報告いただきました。

午後の部は、今回のコロナ禍とそこでの教育の意味を人類史的視点から捉えた山極壽一総長による基調講演「人類の未来を拓く教育とは何か」から始まりました。続いて「大学と社会のこれから：withコロナ & afterコロナの時代に」というテーマの下で、湊長博プロボスト・次期総長、稲垣恭子教育学研究科教授、出口康夫文学研究科教授・人社未来形発信ユニット長に鼎談していただきました。

その後、「コロナ禍における京大の教育の現状と課題」というテーマで、山田剛史高等教育研究開発推進センター准教授より、教員調査・学生調査の結果から見てきた現状や課題について報告しました。さらに、このテーマについて、参加者とMentimeterを使って意見共有し、双方向のディスカッションを行いました。最後に、「京都大学の教育のニューノーマル」について、山極総長、北野理事、川添信介学生担当理事、喜多一情報環境機構長にご登壇いただき、飯吉透高等教育研究開発推進センター長の進行でパネルディスカッションを行いました。参加者の意見に対するレスポンスもまじえながら、活発な意見交換がなされました。



テーマ3(対面とオンライン世界のフラット化:北野先生)



テーマ3(ニューノーマルのベストミックス:飯吉先生)

## (2)参加者の声

参加者の感想・意見をうかがうために、アンケート調査を実施しました(有効回答数117件、回収率33.5%)。まず、「今回のシンポジウムが教育改善に役立つ内容かどうか」では、約8割の参加者が「とても役立ちそうだ」(39名)「まあまあ役立ちそうだ」(63名)と回答しており、全体として好評価を得ることができました。

興味深かったプログラムでは、テーマ3「京都大学の教育のニューノーマルとは」(78名)が最も多く挙げられ、基調講演2の「人類の未来を拓く教育とは何か」(75名)がほぼ同数で続きました。また興味深かった点に関する自由記述では、「対面とオンラインというどちらかということではなく、新たな「モデル」を構築することに気づかされた。」(基調講演1)、「前期の具体事例を知り、後期にどう生かすかを考える貴重な材料となった。」(テーマ1)、「非常に興味深かった。人間にしかできない「教育」、京大にしかできない「教育」をどう紡いでいくか、その一端をしっかり担っていきたい。」(基調講演2)、「京大の自由は自遊、教員との出会い、居着く場としてのラボ。単にコロナでどうするかという話ではなく、京大のあるべき姿を再認識する機会にもなった。」(テーマ2)、「オンライン講義に本格的に取り組んだのが初めてだったこともあり、資料を丁寧に作りすぎた感がありました。報告の中でも不完全な講義の重要性とのお話がありましたが、もっと「行間」を開けて、学生に考えさせるよう工夫すべきと再認識しました。」(報告とインタラクション)、「対面」、「オンライン」は手段であり、目的によっているいるあること、大事なのは教育の目的であり、それによって様々な手段があること、京都大学の教育とは何なのかを改めて考えさせる、とてもありがたい機会であった。」(テーマ3)、といった多様な意見が聞かれ、プログラムは概ね好ましく評価されていました。

また、小規模な勉強会・ワークショップを企画した場合、参加したいと思うテーマでは、「世界の研究大学の教育改革」(50名)、「教育方法(アクティブラーニング、PBLなど)」(43名)、「ICTの教育的活用」(36名)などが多く挙げられました。昨年は「カリキュラム改革」「学生の学びと成長」を選んだ回答者が多かったのですが、今年はコロナ禍という状況もあり、京都大学と同様の研究大学の教育改革への関心、ICTの活用方法や教育方法への関心の高まりが際だっていたことが特徴的でした。

現在の課題や今後に向けてのアイデアについての自由記述では、次のような多様な課題が挙げられました。「実技系の実習(対面でやる医学系の実習など)では、やはり対面でないと技術の習得が難しかったり、対象との距離感を学ぶことができないという課題を抱えています。」「新型コロナでの生活劇変により、体調不良となり、休学を余儀なくされた学生のケア」「オンライン教育のハードルが下がったことで、社会人博士の学生への指導の密度は圧倒的に改善できました。」「教授会なども効率化が重視されているような気がする。学生のため、教育の取り組みについて深く議論できる機会が増えればいいと思う。」「非常勤にTAがつかないこと。」「実習、手技や態度の学習が出来ていない、1年生へのケアが全く出来ていない。VR教材を作成して少しでも何とかしたいと思っています。」などです。

研究力を維持しながらいかに対面・オンラインをうまくブレンドした教育の質向上を進めるか、部局を越えた取り組みをどう活性化していくか、実技・実験といったオンラインでは難しい授業の実施をどう図るか、教員の負担をどう改善するかは、アンケートでも多く出された課題でした。

また初めてのオンライン開催でしたが、「(コロナの問題さえなければ)やはり対面開催の方がよいと感じた」(11名)に対し、「オンライン参加の方がよいと感じた」(88名)と、好意的に捉えられていました。オンライン開催の方が「登壇者の先生方との距離が近く感じてよかった」という意見の一方で、「他の先生との出会いの場ににくい」「ハイブリット型が良い」といった改善点もいただきましたので、引き続き開催形式も含めて充実した内容になるよう改善を続けていきたいと思えます。

当日の詳細な報告書は下記からご覧になれます。

- 全学教育シンポジウム: <http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/symposium.php>

(松下 佳代・原 裕美)





## 全学教育シンポジウム プログラム

司会進行:佐藤 万知 高等教育研究開発推進センター准教授

## 【午前の部】

10:00～	開会挨拶・基調講演1:「京都大学の教育の課題と可能性:コロナ禍を踏まえて」 北野 正雄 教育・情報・評価担当理事、副学長
10:35～	テーマ1:「オンライン教育の取組と経験を振り返る」(パネルディスカッション) 《モデレーター》松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授 《パネリスト》 「PandA “Behind the Scene”」 梶田 将司 情報環境機構教授 「高等教育研究開発推進センターのオンライン授業支援」 田口 真奈 高等教育研究開発推進センター准教授 「オンライン教育の取組と経験を振り返る」 大嶋 正裕 副理事、工学研究科長 「教育学研究科・教育学部の取組と課題」 西岡 加名恵 教育学研究科教授 「オンライン日本語授業の取組事例及び前期授業の検証」 バリハワダナ・ルチラ 国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター教授
12:05～	(昼食・休憩)
【午後の部】	
13:00～	基調講演 2:「人類の未来を拓く教育とは何か」 山極 壽一 総長
13:35～	テーマ2:「大学と社会のこれから:withコロナ & afterコロナの時代に」(鼎談・報告) 《パネリスト》 湊 長博 プロボスト、戦略調整・研究・企画・病院担当理事、副学長、次期総長 稲垣 恭子 教育学研究科教授 出口 康夫 戦略調整担当理事補、人社未来形発信ユニット長、文学研究科教授
14:25～	(休憩)
14:40～	報告&インタラクション「コロナ禍における京大の教育の現状と課題」 《報告者》 山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授
15:25～	テーマ3:「京都大学の教育のニューノーマルとは」(パネルディスカッション) 《パネリスト》 山極 壽一 総長 北野 正雄 教育・情報・評価担当理事、副学長 川添 信介 学生・図書館担当理事、副学長 喜多 一 情報環境機構長 《モデレーター》飯吉 透 教育担当理事補、高等教育研究開発推進センター長、教授
16:55～	閉会挨拶
17:00～	終了

## 2. 新任教員教育セミナー

2020年9月24日、Zoomを用いたオンラインによる「京都大学新任教員教育セミナー2020」を開催しました。本セミナーは、京都大学に採用された新任教員および助教から昇任された教員を対象に実施しています。当日の参加者は当日配布資料の名簿に掲載された人数が191名、Zoom上では一番多いときで、170名程度でした。セミナーでは「今の時代にふさわしい京都大学らしい教育」とはどのようなものかを探求することを目的とし、日本の大学教育の動向や京都大学の教育改革について知り、実際に直面している教育に関する問題や学生指導上に関わる課題などについて共有したりする場所になるようプログラムを構成しています。今年度は、特に、コロナ禍における教育のあり方について考えるためのグループディスカッションセッションを特別にもうけました。

### (1) プログラム

プログラムは表1の通りです。全学、部局、個々の教員という異なるレベルでの教育的取り組みを、ミニ講義や討論などを通じて理解してもらうことを意図して設計されています。

表1 2019年度京都大学新任教員教育セミナープログラム	
13:00～	開会式（司会：山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授） 趣旨説明：松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授
13:05～	セッション1 オープニングレクチャー 「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」 北野 正雄 理事・副学長（教育・情報・評価担当）
13:30～	セッション2 グループディスカッション 「コロナ危機の中で京都大学の教育をどう進めるかー課題や実践知を共有するー」 ファシリテーター：山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授
14:15～	休憩
14:30～	セッション3 グループ別セッション（参加型セッション）（詳細は表2参照） テーマ①「留学生とどう向き合うか」 テーマ②「研究室運営を考える」 テーマ③「困難を抱えた学生に向き合うには」 テーマ④「アクティブラーニング型授業をやってみよう」 テーマ⑤「これからのオンライン授業を考える」

全体会では、まずセッション1として、北野正雄教育担当理事・副学長より「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」と題したオープニングレクチャーがありました。教育改革の方向性に大きな変化はないものの、コロナ禍においてこれまで当たり前でできていた教育活動ができなくなり、あらためて授業やキャンパスの役割、京都大学の目指すべき教育の姿が問われることになったとの指摘がありました。セッション2は、前期に実施したオンライン授業に関する教員調査の結果を参考に、コロナ危機の中で京都大学の教育をどう進めるか、という点について考えるグループディスカッションでした。教員調査からは、オンライン授業に対する一定の手応えを感じる結果が見えつつも、学生とコミュニケーションをとることの難しさや評価手法の問題、学生間の繋がりを作ることの難しさやオンライン授業準備の過剰負担など、様々な課題が感じられていることが報告されました。セッション3は、参加型セッションとして、用意した4つのテーマごとに分かれてのワークショップがありました（表2）。例年、最後には再度全体で集まりジグソー形式によるインテグレーションセッションが行われていましたが、今年度はセッション3でテーマごとに異なるZoomミーティングルームを利用する形式としたため、それぞれのセッションが終わった段階で解散となりました。

表2 セッション3 参加型セッションの各テーマと内容

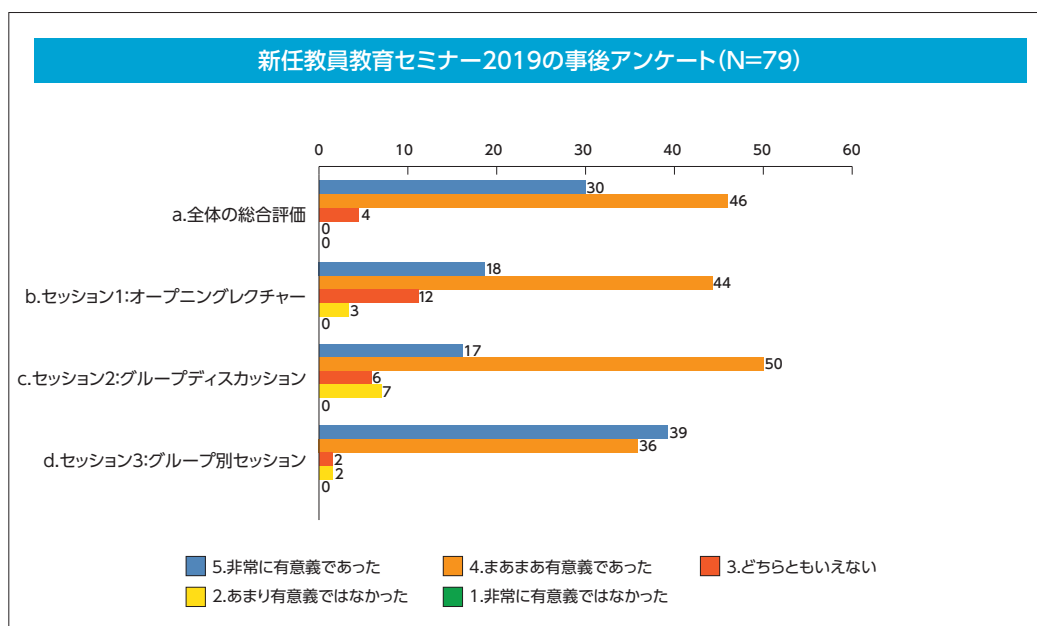
テーマ	担当講師	主な内容	ファシリテーター (センター担当者)
留学生とどう向き合うか ～異文化間理解のとりくみ～	理学研究科附属サイエンス連携探索センター(SACRA) 国際戦略部門講師 鈴木 あるの	研究室や授業のクラス内に留学生を見かけることが普通になりました。異なる語学能力や文化・宗教・政治的背景をもつ国々の学生が共に気持ちよく学び、多様性を建設的な議論へと結びつけるために、教員にできることは何でしょうか。このセッションでは、マナーとして最低限知っておきたい海外事情や異文化の考え方、世界各国の様々な教育制度の概要などを、特に京都大学で起こりがちな問題に絡めながらご紹介します。さらにディスカッション形式で皆様のご経験も共有していただき、より多くの疑問を解決していければと思っています。	佐藤准教授 Sadehvandi 研究員
研究室運営を考える	学際融合教育研究推進センター 准教授 宮野 公樹	教員にとっての研究推進の場、そして人材育成の場である研究室。研究室を研究と教育の原動力として機能させるにはどうしたらいいでしょうか。PI(Principal Investigator)各々のやり方があるとは言え、この機会に一度考えておくのも大事かと思えます。いくつかの事例と調査結果を紹介いたします。	岡本特定講師
困難を抱えた学生に向き合うには	学生総合支援センター カウンセリングルーム講師 和田 竜太	修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのでしょうか。学生のその後の人生を大きく左右する時期に関わっていることを意識し、可能な対応を探るにはどうすればよいでしょうか。今回は様々な不適応の様相の紹介と「困難」を知る、あるいは気づくための話の聞き方を体験・実習したいと思います。	勝間特定助教
アクティブラーニング型 授業をやってみよう	薬学研究科講師 津田 真弘 高等教育研究開発推進センター 教授 松下 佳代	2018年度から薬学部では、アクティブラーニングを取り入れた授業(講義を聴くだけでなく、話す、書く、発表するなど学生側の能動的な参加を含む授業)に取り組んでいます。その中で、学生たちは能動的に参加するだけでなく、協働で深く学ぶ姿勢を身につけてきています。このセミナーでは、その授業で使っているさまざまなやり方、技法を実際に体験していただきながら紹介します。今年度はコロナの影響でオンラインでの実施となりましたが、いろいろな工夫で継続しています。アクティブラーニングについてまったく初めての方から、この機会にしっかり学びたいという方まで参加できます。	原特定研究員
これからのオンライン授業を考える	高等教育研究開発推進センター 准教授 田口 真奈 酒井 博之 情報環境機構教授 梶田 将司	授業におけるICT活用を余儀なくされたこの数か月、初めてPandAを使った、という先生も多いのではないのでしょうか。コロナ禍が過ぎ去ったあとも、対面授業に加えて、ICTを活用することで、授業準備を効率化したり、教育効果をあげたりすることができます。また、京都大学が取り組んできたOCW、MOOC、KoALA(京大のSPOC)を通して、先生の授業を学外に発信したり学内の授業で活用することもできます。本セッションでは、学内のオンライン授業のグッドプラクティスやICT活用事例を紹介し、これからのオンライン授業について考えたいと思います。	鈴木特定研究員

## (2)参加者からの評価

セミナー参加者に対して、セミナーに対する意見・感想を問う事後アンケートを行いました。その結果、80名（教授5名、准教授17名、講師13名、助教45名）より回答が得られました。

### ①プログラムの有意義度

プログラム全体の有意義度について、以下の通りの結果でした。多くの方から有意義であったとの評価を得ました。



### ②プログラム全体・グループ別セッションで追加すると良いと思われるもの、よかった点、改善点等

事後アンケートにおいて、様々なご意見やご感想をいただきました。今後、取り上げるといいであろうテーマとしては、「研究教育の国際化」「課題の与え方」「教育現場におけるハラスメント」「研究指導」「自殺対応」といった様々なものが提案されました。セミナーの良かった点としては、例年他部局の教員との交流が有意義であったとの声をいただきますが、今回は特に、コロナ禍での新規採用で、同僚との交流もままならない状況であったため、こういった機会があってよかったとの声をお寄せいただきました。また、オンラインでの実施になったことについては、ツールを使ってインタラクティブにセッションが進められていたこと、ブレイクアウトセッションで少人数で話げできたこと、などにおいて評価をいただきました。それ以外にも「大学教育全体の動向を知れたことはよかった」「研究だけでなく、人を育てることがとても重要であることがよく理解できた」「改めて教育や研究室について考えるよい機会になった」「他の研究科や研究室の様子を知ることができて良かった」「ロールプレイは参考になった」「オンライン授業のあり方について、専門家の意見を聴きながら考えることができてよかった」といった評価をうけました。一方、改善点としては、タイムマネジメントの必要性、ブレイクアウトセッションの進め方に対するより詳細な説明やセッションの人数調整などが指摘されました。いただいた意見も参考にしながら、今後もよりプログラムになるよう改善していきたいと思ひます。

(佐藤 万知・勝間 理沙)

### 3. プレFD

「プレFD」とは、これから大学教員になるとうとする大学院生やオーバードクター(OD)・ポスドク(PD)のための職能開発活動の総称です。ここでは、本センターが支援する4つのプレFDの取り組みについてご紹介いたします。

#### (1) 大学院生のための教育実践講座

本講座は、将来、大学教育に携わることを希望する京都大学の大学院生(OD・PD・研修員などを含む)のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。2020年度は、8月24日に開催されました。16回目となる今回は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、オンライン(Zoom)での開催となりました。

当日は、さまざまな専門分野から59名が受講しました。参加者数は、前年度から20名も増えました。講座内では、大学教育の現状をおさえるための基本的な講義、それをもとに4つのテーマに分かれて大学教育実践について検討するためのグループワーク、京都大学大学院を修了した若手研究者による、授業実践に関する講義といった多様なプログラムのもと、受講生それぞれが「大学でどう教えるか」という問いに対して考えを深め、また、参加者同士で意見交換しました。全てのプログラムに参加した受講生には総長名の修了証が授与されました。

研修会直後にアンケートを実施し、プログラム全体に対する満足度を5件法(1: まったく満足していない～ 5: 非常に満足し

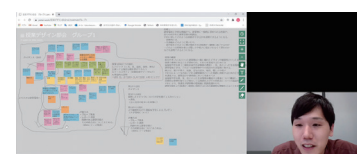
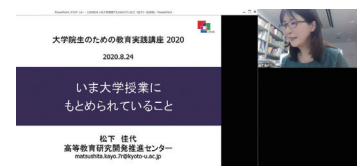
ている)で評価してもらったところ、満足度の平均は4.8と大変高い値でした。また今年度も、議論のまとめと報告、全体での質疑応答を実施しました。やや時間不足の感はありましたが、その評価も4.4と、同じく好評でした。参加前後における大学教育に対する問題意識の変化を聞く質問(自由記述)では、「これまで大学教育についてあまり深く考えたことがなかったが、講座を通して様々な課題があることを知り、『自分ならこのように解決したい』というビジョンをもてるようになった」「研究のことで日々頭が一杯な一方で、大学教員として働くことも考えなければいけないと思っているなかで、本講座はその橋渡しとしてとても有意義でした」「聞き手目線で何を持って帰ることのできる授業にするかを、今後意識していきたいと思った」といった回答がありました。受講者それぞれの視点から、未来のファカルティの一員として、大学教育に対する考えを深める良い機会となったようです。

#### ● 大学院生のための教育実践講座

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/index.html>

(松下 佳代・鈴木 健雄)

2020年度のプログラム	
10:00~	開会式 挨拶: 北野 正雄(教育・情報・評価担当理事・副学長) 趣旨とプログラムの説明: 鈴木 健雄(高等教育研究開発推進センター特定研究員)
10:20~	セッション1 ミニ講義1「いま大学にもとめられていること」: 松下 佳代(高等教育研究開発推進センター教授)
10:40~	セッション2 グループ討論1: 4つの部会に分かれて議論 ①「アクティブラーニング」(岡本雅子)、②「ICT活用」(田口真奈)、 ③「多様性」(勝間理沙)、④「授業デザイン」(長岡徹郎)
12:00~	休憩 Zoomはオフにし、各自でランチ
13:00~	セッション3 ミニ講義2「学生が学びたくなる授業」: 斎藤 有吾(新潟大学准教授)
13:30~	セッション4 グループ討論2: 上記の4つの部会に分かれて、さらに深く議論
15:00~	セッション5 グループ討論3: 部会ごとにグループ討論の整理
16:30~	休憩
16:40~	セッション6 発表と全体討論: 各部会から1グループずつ発表。活発な議論を展開。
17:20~	閉会式 挨拶・修了証授与: 飯吉 透(高等教育研究開発推進センター長・教授)



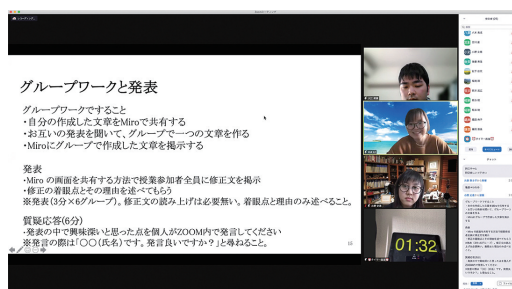
## (2) 大学院横断教育科目群「大学で教えるということ」

京都大学では、所属研究科の高度な専門教育に加えて、研究科を横断する教育プログラム(研究科横断型教育プログラム)を2009年度から実施してきました。2018年度からは当該プログラムを改編して、研究科が開講する科目の中で、他研究科学生の履修にも配慮され、多くの専門分野の共通基盤となりうる科目、多数の研究科の大学院生が受講するに相応しい横断的な教育内容の科目をまとめ、「大学院横断教育科目群」として履修できるように整備されました。

その中の「キャリア形成系」(従来は「マネジメント・キャリア・研究者倫理科目群」)の科目として、将来教育職に就くことを希望する大学院生向けの科目「大学で教えるということ」(後期集中講義)を提供しています。「大学院生のための教育実践講座」は、講義とディスカッションが主体の入門的な内容になりますが、本授業は実際の授業をデザインし、模擬授業やピアレビューを行うなど、実際に授業を実践するうえでの基礎となるスキルの育成を含めた応用的な位置づけになっています。本授業の到達目標は以下の通りです。

- (1) 大学教育の現状を知り、理解すること
- (2) 授業デザインに関する基本的な知識を知り、理解すること
- (3) 効果的な授業デザイン(到達目標・評価方法)を作成すること
- (4) 多様な授業方法を知り、活用方法を計画すること
- (5) 模擬授業・検討会を通じて、授業実践の技能を磨くこと
- (6) グループでの協同作業に積極的に関わること
- (7) 自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージを持つこと

2020年度は2月9日・10日・12日の3日間で実施されました。今年度はコロナ禍において、フルオンライン授業だったため、教員4名TA3名で授業を行いました。受講生は15名で、修士課程から博士後期課程まで幅広い大学院生が受講しました(文学研究科1名、教育学研究科1名、理学研究科1名、医学研究科2名、工学研究科1名、農学研究科2名、人間環境研究科3名、エネルギー科学研究科1名、地球環境学堂1名、経営管理大学院2名)。オンライン授業だったため、Miroなどのオンラインアプリを使用したり、Zoomのブレイクアウトルームを使用したりして、さまざまな形でディスカッションを行いました。そして、専門分野の異なるチーム(4チーム)でコース、授業をデザインし、模擬授業を行いました。終了後のアンケート(15名中15名から回答、回答率100%)では、「学生自身に考えさせる工夫がされていた(平均3.9)」、「内容に関する興味を高めるための配慮があった(4.0)」、「講義に参加しているという感覚がもてた(4.0)」、「総合的に、自分にとって意味のある講義だった(4.0)」(いずれも4段階評定)など高い評価が得られました。自由記述からは、「普段の所属学部の授業とは違い、大学院共通科目の良さが活かされた面白い授業だった」、「文系の方と触れ合うこともなかったので、良い刺激を得られた」、「3日間と言う短いプログラムにもかかわらずとても内容が濃い授業で、非常に有意義な時間が過ごせた」、「自分の専門分野であればどうなるかという点について、さらに自分で深く考えて、実際の授業コマ担当につなげていきたいと思う」、「この授業で、さまざまな分野の人と出会い、社会人になってからもう一度学校に戻ってきた人が多く、みんなとの話し合いやディスカッションを通じて沢山の知識や知恵をもらい、自分の「経験値」が上がった気がする。集中講義は疲れを感じる事が多く、早く終わりたいと思うが、この授業では全然感じなかった」、「グループワークがあまり得意ではないのですが、自分なりに楽しめた」といった様々な声が聞かれました。



(勝間 理沙・松下 佳代・田口 真奈・佐藤 万知)



### (3) 文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科のOD/PDを対象とするもので、2009年度から実施されています。各授業のあとに担当講師と他の講師、コーディネーターを交えた検討会を実施することと、前期開始前に事前研修会を、年度末に事後研修会をそれぞれ実施することが特徴です。所定の条件を満たした参加者には、京都大学総長よりプロジェクトの修了証が授与され、すでに約170名が修了証を得ています。

2020年度は、文学研究科よりコーディネーター5名、教務補佐員3名、講師17名が参加し、本センターより4名がこれをバックアップする形で、哲学基礎文化学系と行動・環境文化学系、基礎現代文化学系の3つのリレー講義が展開されました。

同年度は授業をオンライン化したこともあり、本センターが主導で実施する事前研修会を後期にも実施しました。また例年にも増して積極的に、授業デザインの検討にも参加しています。

各授業の参観者は、オンライン化の影響が例年より多かったように思います。

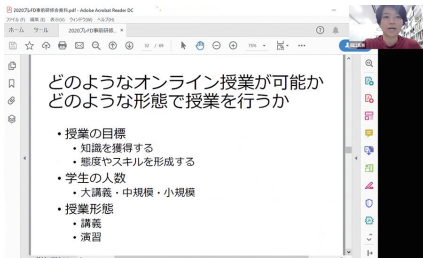
本授業は、公開授業となっており、学内教職員の参観は随時可能です。日程などの詳細は、以下のHPをご覧ください。

● 文学研究科プレFDプロジェクト

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/>



(鈴木 健雄・田口 真奈)



基礎プログラム	
<b>事前研修会</b> ー 授業デザインやアクティブラーニングに関する知識を提供	授業参観
<b>授業実践 (2~5回)</b> ー 形式は担当講師に一任	
<b>「系ゼミナール」</b> 対象：京都大学文学部 1-4回生 内容：担当講師が専門に関するテーマを自由に設定	
<b>授業検討会</b> <b>事後研修会</b> ー 授業実践の振り返り、授業デザインのリ・デザイン	

発展プログラム	
<b>コースデザインの検討</b> ー 担当講師全員で議論しシラバスを作成	授業参観
<b>授業実践 (1~2回)</b> ー 形式はアクティブラーニング型授業 ー センター教員による支援のもとで実践	
<b>「京都で学ぶ人文学」</b> 対象：大学コンソーシアム京都加盟の大学に所属する1-4回生 授業定員：30名 内容：コース目的にあわせて担当講師が専門に関するテーマを設定	
<b>授業検討会</b>	

修了者のみ

### 文学研究科プレFDプロジェクトの流れ

#### (4) 大学コンソーシアム京都・単位互換リレー講義

本プログラムは、文学研究科プレFDプロジェクト修了後の発展的プログラムとして、文学研究科と本センターが協力し、大学コンソーシアム京都との連携のもと提供するものです。前身のプログラムが2015年度に開講されて以来、6年間に亘って開講されてきました。開講にあたっては本センターが支援を行っています。京都大学の学生を含む、大学コンソーシアム加盟校の学生を対象とした単位互換科目で、リレー講義形式で行われます。2020年度は、7大学から35名が受講しました。

本プログラムでは、参加する若手講師たちが、個々の担当授業だけでなく半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼がおかれています。そのため、プログラムは開講の前年からスタートします。そこで、各自の担当授業と全体目標とのすりあわせを行いながら、シラバスを作成するとともに各授業の構想を練ります。また、授業の一週間前にはそれぞれが翌週の授業の概要を持ち寄り、全体の到達目標を見据えつつ、各自の授業目標を確認、そのための具体的な授業デザインを検討し合っています。

2020年度の開講テーマは「京都で学ぶ人文学：『ちゃんとした大人』って何？」でした。本年度はZoomを用いたリアルタイムでのオンライン開講となりました。コーディネーター1名のもと、社会学、歴史学、哲学といったさまざまな専門分野出身の若手講師6名が、オンラインでのアクティブラーニング型の授業を展開しました。オンライン授業もアクティブラーニングも、それぞれ初めて経験するという講師もいましたが、本センターの教職員3名によるサポートを受けつつ、全員が知恵を出し合いながら授業デザインを検討・作成していきました。

受講生間のディスカッションを促すための工夫が凝らされた本授業を通じて、受講生は自立した生活・ジェンダー・死の受容・AI・極限状態における意思決定などをテーマに、多様な観点から考察することで、ものごとを複眼的に捉えることの重要性について学びました。

#### ● 文学部単位互換リレー講義「人文学入門」

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/consortium/>



(長岡 徹郎・鈴木 健雄・田口 真奈)



授業の様子



受講生募集用ポスター



グループワークの様子



検討会の様子

## 4. 他部局との連携

### (1) 薬学部との連携

#### ① 授業改善の支援

京都大学薬学部では、2018年度に実施されたカリキュラム改革によって、少人数で行うアクティブラーニングを積極的に導入し、学生の課題発見・問題解決能力を低学年から育成することになりました。このアクティブラーニング科目のうち最初に行われるのが、1年前期の「薬学研究SGD演習」(SGDはSmall Group Discussionの略)です。この科目では、非言語的コミュニケーション、ロジカルシンキング、医療・生命倫理などが講義とディスカッションを通じて学ばれ、ディベート、研究室訪問などの活動も行われています。今年度はオンラインになりましたが、無事実施されました。本センターは2018年度よりこの授業に協力しています。

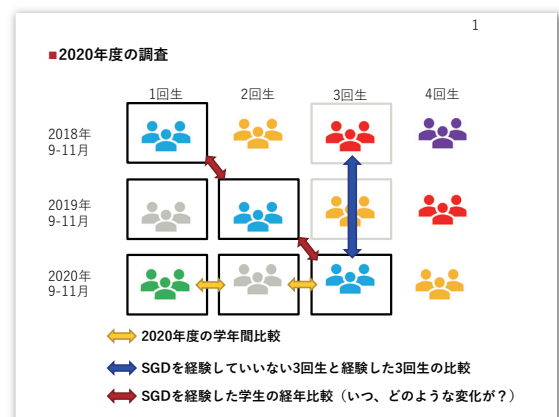
本取り組みについては、ディベックス・ジャパン編『患者の語りと医療者教育—映像と言葉が伝える当事者の経験—』(日本看護協会出版会)で報告しましたが、このたび本書が第9回日本医学ジャーナリスト協会賞「満美子賞」を受賞しました。



#### ② 学生の学習実態調査の支援

このような授業改善の効果検証として、学生の学習や生活の実態に関する調査・分析も進めています。調査は質問紙調査で、薬学部の学生がふだんどのように学習を行っているのか(学習時間、学習コミュニティなど)という側面から、さまざまな能力の獲得感、研究マインド、教員との親密感や所属意識まで、大学生の学習において近年重要視されている幅広い指標を用いています。調査対象は2018年度が1・3回生、2019・20年度が1・2・3回生で、横断調査と縦断調査(パネル調査)の特徴を備えたものになっています。

本調査の結果は、大学教育研究フォーラムでも過去3回報告しており、今年度も報告を行います。



- 杉山芳生・松下佳代・高須清誠・山下富義・津田真弘(2021)「京都大学薬学部における初年次アクティブラーニング科目「薬学研究SGD演習」の3年目の効果検証」第27回大学教育研究フォーラム。

(松下 佳代)

### (2) 医学教育・国際化推進センターとの連携

医学教育・国際化推進センターでは、2016年度から、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラムとして「現場で働く指導医のための医学教育学プログラム(FCME)―基礎編―」(<http://cme.med.kyoto-u.ac.jp/fcme/>)を提供しています。このプログラムは、学生や研修医に対して指導経験のある医師を対象にしたもので、医学教育学全般の知識を習得することで、自身や自施設の教育活動を省察し、改善できるようになることを目標としています。毎年、全国から10名程度の医師が参加し、年3回の参加体験型学習(3泊4日)、および月2回のWeb討論型学習(1回2時間)を通して1年間学びます。「医療・教育を『社会的共通基本』として捉え、暴走する新自由主義と正当に対峙する」など明確でユニークな思想・哲学を持ち、医学教育学の理論にもとづく最新の内容・方法を具体化したプログラムです。

2019年度から文科省の指定が外れましたが、自立したプログラムとして継続されています。本センターからは、「カリキュラム開発：カリキュラムを創る・壊すー自由な学びの場の構築」に松下が講師として参加しています。

今年は、これまでの実績をもとに、錦織宏・三好沙耶佳編『指導医のための医学教育学ー実践と科学の往復ー』（京都大学学術出版会）が刊行され、松下も1つの章を担当しました。社会人の学び直しが、大学・大学院教育の大きな課題になっている現在、国内外で勤務する医師を対象に、Web授業と経験学習を組み合わせた密度の濃いプログラムを実現した例として、とても参考になる取り組みです。

(松下 佳代)



### (3) 宇宙総合学研究ユニットとの連携

京都大学学際融合教育研究推進センター宇宙総合学研究ユニットでは、文部科学省宇宙航空科学技術推進委託費(2019～2021年度)により「有人宇宙活動のための総合科学教育プログラムの開発と実践」が行われています。これは、有人宇宙活動に関わるあらゆる学問分野を含む総合科学を、学部学生を主対象とした有人宇宙教育プログラムとして構築し、その教育実践を行うもので、有人宇宙教育プログラムは、有人宇宙活動に関連する理工人文科学分野の講義からなる基礎教育プログラムと、講義・実習・社会連携からなる専門教育プログラムで構成されています。

本センターは、宇宙総合学研究ユニットに併任教員として参画し、この教育プログラムのカリキュラムや評価のデザインに協力しています。授業評価として学生に対するフォーカスグループ・インタビューの実施や、学習活動・学習評価としてコンセプトマップの作成(事前・事後)などを提案・支援しています。



<https://www.ussp.kyoto-u.ac.jp/humanspace/kyoiku/index.html>



「有人宇宙学」での授業の様子

(田口 真奈・松下 佳代)

#### (4) 情報環境機構との連携

情報環境機構と本センターは、これまでも教育コンテンツ活用推進委員会等での活動を通じて、PandAの活用・普及支援や京都大学のICT利用教育の推進に関して協力してきたが、2020年3月に開始された京都大学の新型コロナ禍下におけるオンライン授業や後期から本格的に導入されたハイブリッド授業の支援の取り組みについては、年度を通じた組織間連携の強化の下で緊密な協働がおこなわれてきました。具体的には、月に2~3回開催される両組織の部局長・教職員による合同連絡会において、学内のオンライン・ハイブリッド授業の実施状況、PandAやZoom等の利用状況、授業・課題提出・試験等に関する課題の共有や解決策の検討、授業担当教員や各部局に対する講習会・相談会の企画・実施報告、「Teaching Online@京大」サイトや情報環境機構HPにおける支援情報・リソース提供の計画、オンライン・ハイブリッド授業等に関する教員調査等の検討などが詳細に渡っておこなわれています。また、この合同連絡会には、協力や情報共有のため、学術情報メディアセンターのセンター長・教員の参加も得てきました。

このように、京都大学において、教育面・技術面をサポートする全学的支援組織同士が緊密に連携・協力を図り、車の両輪のようにバランス良く各部局・教員に必要とされる支援を持続的に提供することは、コロナ禍だけに留まらず、将来にわたって教育・学習の多様化・高度化が進められる中で、より一層重要性を増していくと考えられます。今年、このような有意義な連携の機会と実績を得たことを踏まえて、今後、本センターと情報環境機構との連携・協力体制のさらなる強化が望まれます。

(飯吉 透)

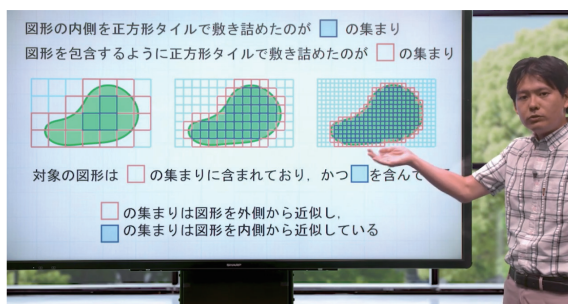
#### (5) データ科学イノベーション教育研究センターとの連携

本センターが運用するSPOC環境であるKoALA(III-3を参照)において、2019年度より国際高等教育院附属データ科学イノベーション教育研究センターが提供するオンライン講義の制作に関して連携しており、これまで以下の2講義を提供してきました。

- 統計の入門(国際高等教育院データ科学教室)
- 数理・データ科学のための数学Ⅱ(中野直人特定講師)

いずれも京都大学の正課の授業向けに設計されたものですが、「統計の入門」は複数クラスでの共同利用を試みたほか、2020年度からは講義を一般にも公開し全国から約700名の受講者を集めました。

また、データ科学イノベーション教育研究センターは「数理及びデータサイエンスに係る教育強化」拠点大学に選定されており、より多くの学習者に質の高いデータ科学教育の機会を提供するため、「統計の入門」を国内のMOOCプラットフォームであるJMOCを通じて公開しました。



「数理・データ科学のための数学Ⅱ」より



「統計の入門」講義紹介ビデオより

(酒井 博之・岡本 雅子)

## 5. 高等教育研究開発推進センターウェブサイト

本センターのウェブサイトは、クリエイティブコンセプトを「RE:EDit(リエディ)」とし、編集を軸にした情報発信、メディアのようなサイトを目指しています。

本ウェブサイトの特徴としては、教員の抱える悩みや教育改善の工夫などを集約し、より双方向的なものにしたいと考え、①必要な人に必要な情報を届けるための情報設計、②発信した情報を元に、教員との交流を促しPDCAを回す仕組みを構築することが挙げられます。日本語サイトと同様の英語サイトも公開しており、京都大学の教員だけでなく、国内外の教育関係者にも広く見てもらうことができるようにしています。

2020年度(2021年1月現在)のユーザー数は24,903名(2017年度は15,925名、2018年度は23,567名、2019年度は21,611名)、ページビュー数は56,373(2017年度56,531、2018年度63,537、2019年度51,598)で、ともに昨年度より増加傾向にあります。とりわけ、2019年9月にリニューアルをした「ASAGAOメーリングリスト」については、ページビュー数が増加していました(表1)。

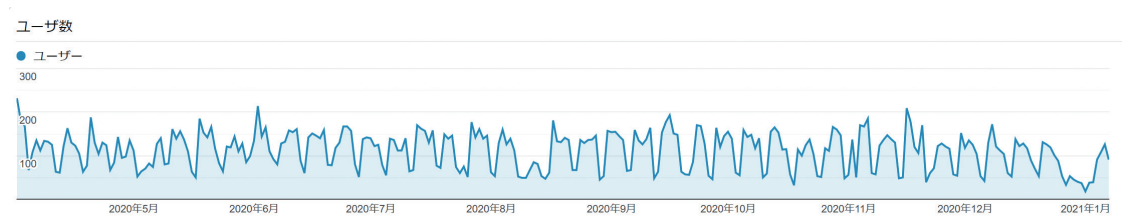


図1 2020年度ユーザー数の推移

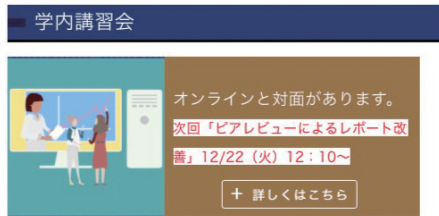
表1 2020年度ページビュー数(全ページ)

2020年度		2019年度	
ページ名	ページビュー数	ページ名	ページビュー数
トップページ	18,015	トップページ	8,295
ASAGAOメーリングリスト	10,798	ASAGAOメーリングリスト	5,521
カリキュラムデザイン	3,503	カリキュラムデザイン	4,992
授業のデザイン・方法	3,020	授業のデザイン・方法	4,291
教育アセスメント	2,949	教育アセスメント	3,507
スタッフ紹介	2,431	スタッフ紹介	2,885
高等教育学コース	1,844	高等教育学コース	1,747
京都大学のFD	1,292	京都大学のFD	1,477
教育・学習へのICT活用	1,126	教育・学習へのICT活用	1,198
出版・刊行物	870	出版・刊行物	1,150

今後も京都大学の教員のみなさんが、オリジナルの教育手法について考える上でのきっかけとなるような情報を発信したり、また授業構成を考えるヒントを探す上で有益なベテラン教員のインタビュー記事を掲載したり、現代日本の高等教育について考えるフォーラム等の情報が見えるようなサイトとして活用していただけるよう、アップデートしていく予定です。ぜひ、本ウェブサイトを訪ねていただき、ご質問やご要望、情報提供などいただくと幸いです。

(岡本 雅子)

## 6. オンライン/ハイブリッド型授業を支援するための学内講習会



### 「コロナ危機の中でも学び・教え続ける」

新型コロナウイルス感染症の拡大のなか、京都大学では、3月31日に、前期授業の5月7日開講が通知され、4月3日には、「学生に向けた総長メッセージ」が出されました。その中で山極総長(当時)は「オンライン授業、オンライン教育リソースで学修機会の確保を」と呼びかけられました。そのための全学サポートにあたることになったのが、情報環境機構と本センターです。同機構はインフラ・テクノロジー支援、本センターは授業支援を担当し、両組織で連携・協力して全学サポートを行って来ました。

本センターの授業支援で大きな役割を果たしてきたのが、3月26日に立ち上げたサポートサイト「Teaching Online@京大」と、3月27日から始めた学内講習会です。学内講習会は平均してほぼ週に1回実施し、2021年1月8日現在、計41回に上っています(表1)。すべての講習会が録画され、資料とともにTeaching Online@京大の講習会のページ(<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/guidances.php>)にアップされています。



### 6つのシリーズ

講習会は最初の5回は対面で行い、YouTube Liveで配信しましたが、6回目(4/17)からはZoomに切り換えました。進めていくうちに、学内講習会にいくつかのシリーズが生まれてきました。

#### (1) ハイブリッド型/オンライン授業に関する講習会・相談会

前期は「オンライン授業に関する講習会・相談会」でしたが、後期からは、ハイブリッド型も加わったので、まとめて「ハイブリッド型/オンライン授業に関する講習会・相談会」と呼んでいます。

このシリーズは主に本センターの教員・スタッフで行って来ました。当初から念頭においてきたのは、「コロナ危機の中でも学び・教え続ける」をいかにサポートしていくか、ということでした。



最初は、「コロナウイルス状況下での京大の授業」「オンライン授業と単位制度」「オンラインを活用した授業のタイプ:同時双方向型とオンデマンド型」「具体的な手続きとティップス:Zoom、PandAとの連携」といった基本的な内容から始めました(3/27・31)。同時に、「相談会」だけの回も設け、オンライン授業を実施するにつれて生じるさまざまな疑問や困りごとにお答えするようにしました(4/9、5/25、6/16、7/20)。

ある程度、基本的な内容が押さえられてからは、個別のトピックも扱うようにしました。例えば、学習評価(6/9)、障害学習支援(6/12)、オンライン試験/PandAテスト・クイズツール(6/30)などです。後ろの2つは、それぞれ障害学生支援ルームと情報環境機構から専門家をお招きして行いました。

後期は対面とオンラインを組み合わせる「ハイブリッド型授業」が増えることが見込まれたため、9月には、情報環境機構との共催で、ハイブリッド型授業の講習会(9/4)、体験相談会(9/17)を実施しました。本センターでは、ハイブリッド型授業を、「ハイフレックス型」(同じ内容の授業を、対面とオンラインで同時に行う授業方法)、「ブレンド型」(対面とオンラインを、教育効果を考えて組み合わせる授業方法)、「分散型」(同じ回に異なる内容の授業を対面とオンラインで行い、学生は分散して受講する授業方法)の3タイプに分けて捉えています。今のところ、ハイフレックス型とブレンド型が多いようです。体験相談会では、希望者には対面で機材やその扱い方を見ていただけるよう、相談会自体をハイフレックス型で行いました(9/17)。



この講習会・相談会のバリエーションとして、外国人教員向けに英語による「Teaching Online Workshop」を4/2に実施しました。

また、出張講習会のご要望を募り、「部局向け講習会・相談会」を地球環境学(4/17)と教育学研究科(5/1)で行いました。

## (2) 私のハイブリッド型/オンライン授業@京大

4/23から新シリーズ「私のオンライン授業@京大」を始めました。これは、さまざまに工夫してオンライン授業に取り組んでおられる個人あるいは組織をお招きして、その工夫から学びあい、大学全体で共有していこうというものです。後期からはハイブリッド型授業も対象に加えたので、「私のハイブリッド型/オンライン授業@京大」と名称を変えました。

4/23から1/8までこれまでに11回+1回実施しています。「+1回」というのは、一度だけ、番外編「Zoom+α」の阪大・岩居先生からノウハウを学ぶ」を行ったためです。それ以外はすべて、学内で面白くて役に立つ取り組みをなさっている先生や部局をお招きして、お話を伺ってきました。

第1回を除き、お昼休みに時間を設定し、ビデオオフにして昼食を取りながら気軽に参加していただけるようにしました。そのせいもあってか、毎回50～150人ほどの参加があり、チャットを使って活発な質疑応答がかわされています。

これまで扱ったテーマは、PandA・Zoomの使い方(4/23)、部局内での新型コロナウイルス対応WGの活動(4/30)、オンライン授業での板書(5/11)、PandA課題ツールの便利な使い方(5/22)、実験・演習科目でのオンラインの取り組み(5/28)、仮想的な実験実習と課題提出(6/4)、オンライン試験(7/15)、大規模講義でのオンライン授業(9/30)、ハイブリッド型授業をiPadを活用して乗り切る方法(10/29)、ハイブリッド型授業における感染拡大防止への取り組み(11/10)、Zoomや各種オンラインツールの使いこなし方(12/3)、教職協働によるオンラインでの記述試験(1/8)です。実に多様なテーマがカバーされていることがわかりいただけるかと思います。

その第1回では、工学研究科教授で教育担当理事補(当時)でもある杉野目道紀教授をお招きしました。杉野目先生は、5月初旬の前期授業の一斉開始に先駆けて4月中旬からPandAとZoomを用いて授業を開始されており、先行事例としてその知見を話していただきました。また、杉野目先生ご自身あるいは参加者の方々が感じていらっしゃる課題を共有し、その解決策を議論する場としても、この回は設定されました。

杉野目先生の事例紹介パートでは、どうオンライン授業をデザインしているのかや、そのためにどのような準備を行い、どう授業を実施しているのかについて、お話しいただきました。合わせて具体的なPandAやZoomの設定・使用方法もご紹介いただきました。

先生が一番に課題と感じておられたのは、オンラインでどう手軽かつ効果的に板書ができるかという点でした。実践紹介後のディスカッションパートでは、その課題に対して複数の参加者より

提案があり、先生ご自身も参考になったと仰っていました。

## (3) ミニディスカッションフォーラム

### 「今、京大の学生に必要な支援・配慮を考える」

キャンパスライフがない状態で過ごす京大生をどのように支援していけるのか、また、大学・部局・教職員の立場で、どのような支援の取り組み・工夫が現在進められているのかについて、学内事例・意見・情報の共有を行う場として設けられたのが、ミニディスカッションフォーラムです。第1回には教育担当理事(当時)の北野正雄先生と、学生担当理事(同)の川添信介先生に話題提供をしていただきました。第2回から第5回までのディスカッションフォーラムでは、学生総合支援センター、附属図書館、生協による話題提供のほか、教育学部、文学部、理学部、経済学部からそれぞれの部局独自の学生支援の取り組みをご紹介いただきました。両理事を含め、多くの教職員に積極的にご参加いただき、皆で議論を深めました。

## (4) TA 講習会「TA としてハイブリッド型/オンライン授業を支援する」

オンライン授業の円滑な実施にはTAのサポートが有効です。そこで、どのようにオンライン授業の支援をすればいいのかに関するTA向けの講習会を前期・後期のあわせて2回実施しました。後期については、ハイブリッド型授業を支援するための基礎的な知識・スキルを加えました。

TAだけではなく、TAとどのように協働すればよいかを探る教員からの参加もありました。特に第1回のTA講習会は、予想をはるかに上回る参加があったため後から録画ビデオを見ていただくことで対応せざるを得ませんでした。また、TAの中には、聴覚障がいをもつ学生もいたため、録画ビデオに字幕をつけることで対応するなど、新たな課題も見つかりました。

## (5) 「こんなこともできる! オンライン授業」

後期に入る直前の9月に3回行ったのが、「こんなこともできる! オンライン授業」と名付けた講習会です。後期から初めてオンライン授業を実施される先生向けには前期の録画ビデオとウェブページで対応し、この講習会は前期でオンライン授業にだいたい慣れたという先生に向けて実施しました。

第1回は、オンライン授業で可能なことを見取り図にして示し、そのうちのいくつかを事例やデモで提示しました。また、第2回はビデオ教材をオンラインで使うためのノウハウや注意事項について取り上げました。第3回は、BookRollの開発者である学術情報メディアセンター緒方広明教授に、BookRollでどのようなことができるのかをデモを交えて授業例をご紹介いただきました。





(6) 「ポストコロナの大学授業」シリーズ

11月末に開始したシリーズ「ポストコロナの大学授業」はポストコロナを見据えて、授業形式が対面であれ、オンラインであれ、ハイブリッド型であれ、大学の授業や学生の学びを向上させるのに役立つ方法をご紹介します。第1回は「オンラインではみえづらい学生の考えを引き出す工夫」と称して、授業中または授業後に学生からのアウトプットを引き出す具体的な方法や工夫を、参加者の協力を得ながら実演しました。ビデオをオンにしながらのインタラクティブなワークショップとなりました。第2回は京都大学のOCW、MOOC、SPOCの制作や運用を担当してきたスタッフによる「簡単に作れるオンデマンド型ビデオ教材」を実施しました。ビデオ教材を作成する際のノウハウやちょっとした工夫・コツ、また、作成したビデオ教材をインターネットで公開する場合の注意点などを取り上げました。第3回「書いて終わり、ではもったいない！学生同士のピアレビューによるレポートの

改善」では、学生のレポートを改善するために、学生同士が相互評価をする実践を3年間にわたり、対面授業、オンデマンド型授業、同時双方向型授業で実践してきた授業者とTAから、その具体的な方法を紹介いただきました。

いずれの講習会もテンプレートやワークシート、事例集などが配布され、すぐにでも役立てていただけることが目指されました。

\*

\*

本センターでは、前身の高等教育教授システム開発センターの時代から、教育のエキスパートによる「啓蒙型FD」ではなく、教員がともに自らの教育改善をもとに学びあう「相互研修型FD」の理念を掲げてきました。学内講習会では、さまざまな部局の教職員が講師となり、その工夫を他の構成員と共有し学びあうことで、「コロナ危機の中でも学び・教え続ける」を実現してきました。図らずも、このコロナ禍の中で、ようやく「相互研修型FD」の理念が具体化したように思います。

(松下 佳代・田口 真奈・鈴木 健雄)

表1 学内講習会一覧(2020.3.27~2021.1.8) \*シリーズごとに色分け

Table with 7 columns: No., 日程, シリーズ名, 副題またはテーマ, 講師(所属・職階), 参加者数, 視聴数(1/12). Rows list various workshops and seminars from 2020 to 2021.

3766 3837